

伝道上からみた四諦説の臨床的考察

皆川 広義

一

仏教の宗教としての機能は、人々を生死の苦悩から救済するものである。

釈尊はその生死の苦悩からの解脱道を苦・集・滅・道の四諦説として、次の通り説示している。

「比丘たちよ、苦の聖諦とはこれである。いわく、生は苦である。老は苦である。病は苦である。怨憎するものに遇うは苦である。愛するものと別離するは苦である。求めて得ざるは苦である。総じていえば、この人間存在を構成するものはすべて苦である」

「ところで、比丘たちよ、苦の生起の聖諦はこうである。いわく、迷いの生涯を引き起し、喜びと貪りとを伴い、あれへこれへと絡まりつく渴愛がそれである。すなわち、欲の渴愛・有の渴愛・無有の渴愛がそれである」

「比丘たちよ、苦の滅尽の聖諦はこうである。いわく、その渴愛をあますところなく離れ滅して、捨てさり、振り切り、解脱し

て、執着なきにいたるのである」

「比丘たちよ、苦の滅尽にいたる道の聖諦はこうである。いわく、聖なる八支の道である。すなわち、正見、正思、正語、正業、正命、正精進、正念、正定である」^①

釈尊はこの四諦説をサルナートの初めての伝道の折に説示され、その後もしばしば説いている。四諦説は仏教の基本教理である。それはどうすれば生死の苦悩を解脱し、安心や生きがいを得られるか、その道すじを体系的に示したものである。その教理は前半の苦・集という宗教的な人間考察と後半の滅・道という苦悩解脱の実践道の説示の二つからなっている。つまり、苦諦ですべての人間の死ななくてはならない存在を示し、集諦でその原因を究明し、滅諦でどうすれば苦悩から解脱できるかの理論を説き、道諦でその具体的な解脱道をあげている。

ところで、我国における今日の葬祭仏教はその活動がほとんど人間が死んだ後に関するものであり、仏教本来の機能で

ある生死の苦悩から人々を救済する営みを失つてゐる。

したがつて、私たちは仏教によつて説示された教理を、今日実証し得る場を持ち得ないのである。それは例えば、ガンについて理論的にすぐれた治療がみいだされたとしても、その臨床例がなければ人々にその治療法を実施できないのと同じことである。

仏教によつて人々を生死の苦悩から救済しようとする立場にある者にとつて、教理の現代における臨床的考察は、医学における臨床実験と同じように重要なことである。現代において教えにより悟りと安心が得られたという臨床的裏付がなければ、自信をもつて教えを広め、それによつて人々を救済することができないからである。

このような問題意識をもつて、このたびは仏教と直接的関係はないが、まさに仏教の説示通りに実践して生死の苦悩を解脱し安心と生きがいを得た、進行性筋ジストロフィー患者・甲山政弘君の詩集『長い道』⁽³⁾を考察しながら、現代における仏教教理の臨床的考察をしてゆきたい。

二

進行性筋ジストロフィーという病気は今日でも原因や治療法がまったくわからない難病で、大体四、五歳位の子どもに発病し大半が十五、六歳で亡くなつてしまうという恐しい病気である。

伝道上からみた四諦説の臨床的考察（皆川）

甲山政弘君は昭和三十二年四月三日埼玉県羽生市に生まれ、三歳のとき健康優良児になるような丈夫な子どもであつたが、五歳のときこの病にかかり、小学校一年二学期に当時創立されたばかりの千葉県四街道養護学校に入り、学校と隣接している国立療養所下志津病院で治療を受けながら、昭和四十九年七月三日に亡くなるまで、この恐しい病気と戦つてきたのである。この闘病生活のなかから詩集『長い道』が生まれたのである。

初期の作品のなかには、四諦説の苦諦にあたる病によつて甲山君の前に立ちはだかつた、死の恐怖を詩にしたものが多くみられる。それらは次の詩のようにまさに少年の死に対する恐れおののきの言葉である。

たすかることはない

僕たちは 今 一秒

一分という間にも

どんどん病気にすいこまれていく

アリ地獄のごとく……

ああ もうどうやつても

どうもがこうと

たすかることはできない

ただ すいこまれ

短い時間を持つだけ

ところが、死の恐怖をじつと耐えている少年の心に小さなひらめきが生まれる。つまり苦諦が苦悩をのりこえる智を生み、集諦へと展開して行くのである。それは生きているという自己の生命の悟りでもある。

生きる

生きるということは

ほんとうにすばらしいことだ

なんにしてもいいことだ

苦しくたつて 悲しくたつて

生きているからこそ味わえる

喜びがたくさんあるんだ

自己の生呼を実感した澄んだ眼は、まわりの動植物の生命を自己の生命と同じものと悟り、さらに風や水の音にも生命を実感するようになる。

水のおしやべり

なにげなく水をのむ

ただなにもきにせずに すると

カチャ カチャ カチャ カチャ

コツ コツ コツ

と音がきこえる

まるで僕に話しかけるように

カチャ カチャ カチャ カチャ

コツ コツ コツ

水よ おまえは

なにが話したいんだ

友だちになつてほしいのか

こわいのか

おまえもかわいそうだな

ことばがいえなくて

また、この澄んだ少年の眼は次に慈悲や報恩の行へと展開して行くのである。これは滅諦で説えている苦悩の原因である渴愛を滅する行として、慈悲や報恩行を実践していることになり、彼はこれによつてみごとに大いなる悟りと安心を成就しているのである。

一本のろうそく

たつた一本のろうそくでも

人間以上のすばらしい

生き方をしている

火をともしたらろうそく

ろうそくは自分の体をも

とかしながら人に尽くそうとし

ところと汗を流しながら働く

最後には体がなくなつてしまうのに

短いその命なのに

悲しまずたえしのび

ああ　ああ

ろうそくよ　ろうそくよ

僕はおまえのようになりたい

現代の豊かな物質文明に見捨てられ自分の幸せを見つけることの困難な少年が、どうしてこのような人々の幸福を念じる暖い心を持つのであろうか。

わけてあげたい

もしも小雨のベールのむこうに

幸せがあるのなら

僕はいますぐとんでいきたい

そしてその幸せを

できるだけ沢山のの人に

わけてあげたい

僕よりもつと不幸な人に

僕よりもつと苦しい人に

この詩を読むと人間に仏性があるという仏教の教えが信じられる。甲山君は晩年鉛筆をヒモで手にしぼり口でくわえて文字を書いていた。亡くなつたとき親指と人さし指がかんだ歯のため肉が切れてまつ黒な骨がでていたというのである。どうしても病身の少年にこんなとほうもないエネルギーが秘められているのであろうか。

伝道上からみた四諦説の臨床的考察（皆　川）

ありがとうを言う

ありがとうを言う

お世話になつてゐる方々に

ありがとうは感謝の言葉

ありがとうは幸福の言葉

でも感謝するだけでは

すまされないこともある

だけど今はありがとうしか言えない

ありがとう　ありがとうございます

このようにして甲山君の報恩行の実践は、彼に大らかな智慧と慈悲と生きる力を与え、それによつて彼は安心と生きがいと間違いなく現成することができたのである。われわれははからずもここに甲山君の尊い生きざまを通して仏教教理の現代における臨床的実証をみることができるのである。

1 増谷文雄著『根本仏教』筑摩書房刊 51

2 拙稿「四諦説をふまえた現代的説示法について」（『教化研究』22）

3 甲山政弘著詩集『長い道』新書館刊

（駒沢大学助教授）